“Budo”
Aikido Founder Morihei Ueshiba’s 1938 Technical Manual

Distributed by the Aikido Sangenkai:
http://www.aikidosangenkai.org

道　文

武道ハ神ノ立テタル神ノ道ニシテ眞善美ナル無限絶對ノ全大世界御創造御經綸ノ精神ノ道也ト思考ス。

稽古ノ德ニ依リテ天地ノ理ヲ見ルベシ。夫レ技ハ水火ノ眞妙ヲ出シ天地ノ道又皇道精神ヲ畫キ其業ハ言魂ノ妙用ヲ示シ理ハ世界萬有ノ教導トナリ世界萬有ヲ和シ天地神人合一和合タリ。其德ハ光トナリ熱トナリ兩者天地人合氣ノみつるぎトナリ時ニ乘ジテハ天地ノ理ヨリ來ル邪氣ヲ天地人共ニつるぎノ道ニテ常ニ惡魔ヲ切リ拂ヒ美シク世ヲ清ムルノ道ト思考ス。故ニ正覺ニテ自己ノ思フママニ天地春夏秋冬萬有ヲ利用シ又萬有ノ眞性姿態言行モ見直シ聞直シ清ク善美ニ武技ニ直シテ達行スル事ヲ得又天地人和合ノつるぎト現ハレ自己ノ思フママニ自己ヲ清練ナスニアリ。

法ニ就テ

自己モ自己ノモノモ更ニナシ皆御稜威ニ依リテ武ノ道ヲ頂キ御稜威ニ依リ人者現幽兩界ニ出入ナシ生通シテ惟神ニ武ノ任務ヲ遂グルニアルモノナリトス。又自己ノ思フ通リニ敵ヲ導ク之レ武道也。法ハ大武氣ノ內流ヲ受ケテ心身ニ武氣ノ充實ヲ本旨トシ氣ヲ練リ心魂ヲ練リ生死ノ巷ニ於テ全心體ニ練込ミ練合シ法ヲ修メ行ヲ研キ進ンデ天地ト共ニ練合シ悟行一致全心體ニ武

魂充滿悟道鎭魂ノ儀也ト思考ス。

此世界志ろ志めします大君の
　　みいづによりて勇み進まん
氣のみわざたまの志づめやみそぎわざ
　　みちびきたまへ天地の神
己が身にひそめる敵をエイと切り
　　ヤアト物皆イエイと導け
眞の武は筆や口にはすべからず
　　ことぶれなせば神は許さず
つるぎわざ筆や口にはつくされず
　　言ぶれせずに悟り行へ
奇びなる劍の道の御經綸（オンシグミ）
　　熱も光きおのが心に
武魂を養ひ磨け世の中に
　　道を照せよ神のまにまに
神習ふ道のしぐみは惟神
　　合氣の道や伊都能賣の神

惟神錬り上りたる宇宙劍
　　光と熱に悟り行へ
鍛錬のみのりにたまふ合氣の身
　　唯ありがたく稜威仰よ
惟神身魂は合氣卽つるぎ
　　研け光れよ現世の內
御劍に研ぎすましたる神魂
　　神武夫（かむものの）と神はゐみなん
惟神錬り上りたるみつるぎは
　　すめよ光れよ神の惠みに
道人のするどく光る御劍は
　　身魂の中のひそむ惡魔に
すみきりのするどく光る御劍に
　　惡魔の巢くふすきとてもなし
たか〳〵はすきなく光り世を開く
　　劍の道は人の身魂に

萬筋(よろづすじ)限り知られぬ劍道
　　世を開くべく人の身魂に
大宇宙劍の中に武夫の
　　光となりて世にぞ開かん
劍業無と言ふ心惟神
　　魂は言わずも神と光りつ
聲もなく心も見えず惟神
　　神に問はれて何物もなし
誠とは劍の道と人は言ふ
　　神に問はれて答ふすべなし
聲も見ず心も聞かじ劍業
　　世を初めたる神に習ひて
ゆるぎなく大宇に生へし御劍は
　　文武兩刄とかみのしぐみぞ

古より文武の道は兩輪と
　　稽古の德に身魂悟りぬ
武夫の敵に向ひし其時は
　　萬法すべて文となりとぐ
文は又表に起てる其時は
　　身魂は劍萬づ導く

目次

技法眞髓

第一　心身變化ノ理……一
第二　修業ノ方法……二
第三　正面ノ鍛錬……三
第四　横面ノ鍛錬……四
第五　手　ノ　業……四
第六　後ノ鍛錬……六

技法圖解竝解說

第一　練習上ノ心得……八
第二　準備動作……九
構
入身
體ノ左右ノ變化
入身轉化
第三　徒手對徒手……十一

正面
横面
投ノ鍛錬
合氣ノ鍛錬
後ノ鍛錬
第四 徒手對刀……二十六
正面
横面、胴
短剣
第五 刀對刀……三十
籠手
面
突
第六 銃剣……三十二
第七 終末動作……三十六
體ノ變化
氣力ノ養成
臂力ノ養成
背ノ運動

技法眞髓

第一　心身變化ノ理

敵ト云フ者ハ惟神ニ起キタルモノニシテ自己ノ心身ヲ誠ニ作リ上ゲル爲メノ修業鍛錬ノ賜ト思ヒ敵劍ヲ以テ我ニ向フ時ハ其生死ノ巷ニ於テ能ク心身ヲ落付ケ道ニ從ヒ敵ヲシテ乘ズル隙ヲ與ヘズ自己ノ思フ儘ニ敵ノ心ヲ抑ヘ自己ノ思フ儘ニ時ヲ作リ間髪ヲ入レズ眞直グニ斜ニ又自己ノ思フ通リニ入身ノ心線ヲ起シ全身一致ノ誠ノ劍ト化シテ突進シ敵ヲ滅却サスベキヲ思フ。是大和魂タル日ノ本經津ノ魂ノ御劍ノ御儀ト思考ス。

因ニ劍ハ武夫ノ魂ナリ又宇宙眞性ノ現レナリ劍ヲ徒ニ扱ク時ハ自己ノ魂ヲ弄ブモノナリ。

兩者劍ヲ以テ相對スルハ身魂ト身魂ノ誠ノ證ヲ立合ヒ世ノ邪氣ヲ拂拭スルニアリ、劍法惟神ノ大道ニ適ヒナバ宇宙ノ理ハ生ジ天地萬有和合其身魂ヲ助ケ長久ニ生榮エントノ事ヲ思フ。

御祖神ノ至仁至愛タル至誠ヨリ出デシ眞武ノ心卽チ誠勇誠智誠愛誠親ノ四魂ヲ一ツニ劍ノ下ニ修シ精魂ノ成身養體ノ磨キニ依リ全心身ハ劍化劍光ヲ放ツベシ。

世ノ中ニスポーツト申スモノアリ、體ハ大キクナリ、武夫ノ身體ノ基礎ヲ作ル事アルモ心ノ通リノ體ニシテ鎭マル心ハ善美ト云フ不能、武ヲ錬レハ武魂ヲ養フニ適スル誠忠ニシテ善美ナル肉體ヲ作リ上ル事ヲ得。

道ハ廣大ニシテ古ヨリ未ダ現世ニ於テハ全キモノヲ見ス聖眼理ヲ悟ルヲ得ズ名人聖者ノ言行其一片ヲ表解盡ス不能自己言フ不能モ只光ト熱トニ神習ヒ稽古ノ德ニ依リ神人合一シテ一片ヲ悟リ行フノミ。

第二　修業ノ方法

戰法體ノ變化ハ極リナキ榮ノ道ニシテ一ヲ以テ萬ニ當ルノ道ナレバ一ヨリ萬法ヲ生ミ開キ萬劍ヲ練リ其ノ責ヲ遂ゲ達成セシムルニアリ心ハ常ニ澄キリシ大空ノ如ク大海ノ如ク又大山ノ如ク又何事モ思フベカラズ。

入身ニ於テ

敵劍ヲ以テ我ヲ討タントスル時我左足前ニアレバ敵ヲシテ我呼吸ヨリ來ル理ノ拍子ヲ以テ横入身ノ構ノ體勢ニナリテ右手ニテ後ノ敵ヲ斬リツツ間髪ヲ入レズ後足卽チ右爪先ニテ大地ヲケリ左足ニテ突進後方ニ入身ヲナシ同時ニ左手ヲ以テ敵ノ右後部ヨリ薙ギ直チニ右足ヲ敵ノ後方ニ踏込體勢ヲ崩サズ兩手ニテ敵ヲ倒スベシ。我ガ右足前ノ時モ前項ニ準ジ敵ノ左後ニ入身スベシ。

體ノ左右ノ變化

體ヲ變化スル場合ハ前項入身ノ方法ニ從ヒ前足ヲ軸トシテ間髪ヲ入レズ電光ノ如キ速サヲ以テ（左足前ノ時）後足ヲ左横ニ引キ開キ同時ニ體ヲ右ニ向ケツツ體ヲ左横ニ引キ前後又左右ノ敵ヲ倒スベシ。又其左右後方ニ體ヲ變化スル時體ヲ崩サザル樣ニ轉開スルヲ要ス。人體ニ於ケル轉開ノ度數ハ最初線經ニシテ三百六十度ノ間ヲ心ノママニ轉ジ行フベシ。

入身轉化

敵我ニ立向ヒタル時ハ前項入身ニ基キ敵ノ背後ニ突進入身ナシ更ニ入身セシ時ハ體ノ變化法ニ基キ前足ヲ軸トシテ時ニ乘ジテ身ヲ右左又各線ニ轉ジツツ周圍ノ敵ヲ倒スベシ。

然レドモ戰ハ皇道ニ卽シ絶ヘズ、武ノ氣道ヲ生ジ起シ能ク練リ電光ヨリモ敏ク機ヲ作リ行フ事同時ナルベ

シ古ヨリ技ハ電飛ノ如ク入身轉化シ打ツ事雷擊ト云フモ是レ皆人ノ目ニウツルモノニシテ能ク鍛錬ノ結果達成シ得ルモノナリ宇宙水火ノ働キノ如ク目ニ見ヘザル迄ニ神進ミ修スベシ

第三　正面ノ鍛錬

右或ハ左手ニテ打込ノ事

手刀ヲ以テ(或ハ拳)。敵ヲ打ツニハ天地ノ道理ヲ悟リ顯幽一如水火ノ妙體(神人合一)ニ心身ヲ置キ天地人合氣ノ劍身卽チ手刀ハ宇宙心身一致ノ働キト神化シ上下身圍ハ熱光ヲ放ツ如ク寸隙ヲ作ラズ敵ヲシテ道ノ呼吸氣勢ヲ與ヘズ依テ以テ打込ム事ヲ悟ルベシ。斯ク打込ンデ來ル敵ニ向ツテハ何時モ、樂天ニ自分ノ心ヲ宇宙ノ大精神ニ神習ヒ心魂ヲ鎭メ落付キ雄大ナル氣持ノ中ニ敵又物皆ヲ包ミ道ニ住シ、斯ク對スレバ敵ノ動作ヲ明カニ見拔ク事ガ出來得、ソレニ合シテ右或ハ左ニ體ヲカハス事モ出來ルモノナリ。

又敵自分ノ心ノ中ニアル時ハ自分ガ天地ヨリ受ケタル所ノ道ニ敵ヲ導ク事ガ出來得ベシ。例ヘバ前後左右ニ敵ヲ引付ケタル場合前ナル敵ニ氣勢ヲ送リテ敵ノ劍ヲ遵キ從テ前ヨリ敵ニ打込マセ左或ハ右ニ進轉シテ敵ヲ背後ヨリ倒ス事ガ出來、生死ノ境ヲ明カニシ得ベシ、如何ナル事ニ臨ンデモ九分九厘敵ノ壓迫ヲ受ケテ死地ニ入ルモ明ナル道ハアルベシ。行ハ雷擊雷飛ヨリモ早キヲ要ス。是等ノ事ヲ心ニ置イテ鍛錬シ敵ヨリ壓迫ヲ受ケザル樣心掛クベシ。

古ヨリ兵法ハ何物モ皆御稜威ノ賜ナルノ理ヲ教エ平素道ニ依ツテ天地ノ意氣ヲ以テ戰鬪スル呼吸ヲ對照的ニ練磨シタルモノニシテ、此ノ場合適當ノ距離ヲトル。コレ宇宙顯幽水火ノ理ニ依リ彼我ノ體的靈的ノ距離ヲ中ニ於テ相對シ宇宙ト共ニ水火ノ活妙力ヲ練リ込ミ練リ合シ誠ノ武夫誠ノ戰法ヲ作リ限リナキ誠ノ世界ヲ

開キ人ト世界ハ清ク和合シテ御稜威ニ依リ現幽兩界ニ榮アル行ヲ悟ル正シキ道ノ精神ヲ作ルノガ武道ノ練磨デアル。又各自武道ヲ修スル者ハ其技天地ノ經綸ノ道ニ一致シ又大キク悟リ卽行ニ現ハルモノナリ。故ニ勇智愛親ノ誠魂ハ一致全心身美ハシキ勇マシキ劍トナルモノニシテ、悟リカラ悟リヘト大道法ヲ建設ナシ天下ヲ守リ、小ニシテハ一身ヲ作ル。日本武夫ノ練磨デアル、又岩戸開キノ行デアル。且ツ人ノ心ハ水火萬有ヲ司ルモノナレバ是ノ水火陰陽ノ理ニ依リテ敵若シ氣ヲ以テ當レバ氣ニ當リ水ヲモッテ來レバ水ニ當リ火ヲ以テ來レバ火ニ當リ今日ノ化學戰ノ上ニ想ヲ馳セ練磨スルコトヲ肝要トス。

第四　横面ノ鍛錬

手刀ヲモッテ敵ノ横面若シクハ敵ヲ斜ニ肩口ヨリ切リ下ロス氣持デ打ツ。相手ハ敵ノ出様ヲ知ッテ敵ノ氣ヲ誘ヒツツ左足ヲ輕ク引キ敵ノ氣ヲ拔キ其ノ機ヲ逸セズシテ陰陽（水、火）ヲモッテ攻メタテル氣デ敵ノ右（或ハ左）ノ手首ヲ左手前ニ引キ摑ミ右手ヲ持添ヘテ左足ヲ大キク踏ミ込ミ右ニ轉ジツツ陰陽ノ理道ニテ敵ヲ右前ニ投ゲル。丁度敵ノ全力ヲ我ガ戰ノ利法ノ道ニ集メ拍子ヲ取リツツ水火ノ現幽妙理ヲ起シ左側面ヨリ薙ギ正中ヲ突キ破リ又轉化シテ敵ノ右後ヨリ切リ拂ヒ殲滅サスベキ戰法ノ一片ナリ。斯ル兵法ノ下ニ此ノ横面動作ガ毎日疊ノ上デ行ハレルノデアル。

又巧ニ地區地物萬有ヲ利用シテノ戰法ト心得フルヲ要ス。宇宙劍ノ法線タル兵法トロ傳ガアリ稽古ノ際傳フベシ。

手ト足ト腰ノ心ヨリノ一致ハ心身ヲ守ルニハ最モ必要ナ事デ殊ニ人ヲ導クニモ又導カレルニモ手ニヨツテナサレル。一方デ導ビキ一方デ倒ス是ヲヨク理解シナケレバナラヌ敵ガ引カウトシタ時ニハ先ヅ敵ヲシテ引ク心ヲ起サシメ引カスベク仕向ケル。武術ノ鍛錬ガ出來テ來ルト敵ヨリモ先ニ敵ノ不足ヲ滿足サスベクコチラカラ敵ノ隙卽チ不滿ノ場所ヲ見出シテ業ヲカケル。此ノ敵ノ隙ヲ見出スノガ武道デアル。然シ眞ノ武道ハ敵ヲ殲滅スルダケデナク其ノ敵對スル所ノ精神ヲ敵自ラ喜ンデ無クナサシメル樣ニナサネバナラヌ。和合ノ爲ニナスガ眞ノ武道デアル。心身ハ水火ノ妙體其ノ精神トガ一如トナツテ和合スル樣練磨怠ルベカラズ敵我ノ手頸ヲ取ラントスレバ左足ヲ引キ取ラントスル手ヲモツテ敵ヲ導キ一方ノ手ヲモツテ首ヘ打チ下ロスベシ。

日本ノ武術ハ皆天地ノ敎ヲ盡キ出スモノデ例ヘバ敵多數槍ヲ以テ我周圍ニ引寄セ押シ進マセタル時ト雖モ其レヲ一人ノ敵ト看做シテ切リ拂フ心ヲ以テ行フベシ。

古人ノ如ク後ニ柱ヤ樹木ヲ小楯ニスルト云フ事ハ間違ヒニテ、人モ賴ルベカラズ我ガ心ガ眞ノ小楯ニシテ向フ敵ハ我ガ心ノ隙キヨリ現レシ理ヲ悟リ眞正面ヨリ突來ル槍ノ眞中心ニ入リ身轉換ノ法ニ依ツテ無事ニ其圍ミヲ破ツテ安全地帶ヘ出ヅベシ。斯ク周圍ヲ全部敵ニ取リ卷カシタル時ト雖モ入リ身轉換ノ法ニ依ツテ破レザル姿勢デ敵ヲ壓迫ナスベシ。法線ヲ知ルベシ邪道ニ練磨スベカラズ、神ヨリ頂キタル小宇宙ヲ徒ニ破ルベカラズ。

敵ヲ殪ス是レ武術ノ稽古ナリ此ノ道理ヲヨク汲ミ體ニ盡キ出シテ稽古スベシ。大勢ノ時ハ一人ト思ヒ一人ノ時ハ大勢ト思ヒ戰フベシ。一ヲ以テ萬ニ當ル理ヲ知リ隙ヲ與ヘザル樣ナスベシ。夫レ心身ニ寸隙ナキ大和魂ノ誠ヲ作リ上ゲ上中下一致前後左右ノ敵ヲ誠入身轉換法合氣ニヨリ心ヨリ征伏スルノ稽古ガ必要デアル。

超非常時ニ入リ世界全部敵トナリシ時此ノ心技ガ特ニ必要デアル。心ユルスベカラズ。

神ノ心ヲ人ノ肉體ニ建設シ。闇ヲ照破スル光ノ如ク更ニ更ニ深ク稽古ヲ積マネバナラヌ。

古人ノ極意ノ書ニ「太陽ノ光ガ襖ヲ開ケルトイツ入ツタトモナシニサシ入アル如ク。武術モサウデナケレバナラヌ」トアルモ襖デモ壁デモ岩デモ何デモ照破シテ通リ抜ケル樣ナ光トナル樣修スベシ。又道ハ魂モ身モ物モ皆主神ノモノナリ。御稜威ニ依リ現幽兩界ニ生通シ武夫ノ本分タル武技ヲ達成ス。現世ニ修シ幽界ニ修シ繰返シツヽ限リナク長久ニ兩界ヲ修ス。其ノ精神コソ現世ニ誠忠幽世ニ入リテ益々誠忠ヲ盡スベキヲ本分トス

道ハ廣大ニシテ窮リナキ現幽兩界ノ經綸者也武夫ハ最モ神ノ生宮トシテ現幽兩界ヲ經綸ニ奉仕シ又劍電下戰場ヲ修業ノ道場ト心得時ヲ失セズ自己ヲ失ハズ自己ヲ清メ自己ヲ作リ上ゲ世ヲ清メ世ヲ作リ責ヲ遂グベキモノナリ。

第六　後ノ鍛錬

（一）後業ハ大攻撃ノ心身ヲ以テ初メテ敵ノ後ヨリ打チ又切ル事ヲ得、又敵ヲ我ガ思フ儘ニナスヲ得ルモノナリ、然レドモ敵不意ニ後ヨリ立向フ時肉體ノ魂ニ五體ヲ具備セル一人格ノ働ヲナス樣ニ武術ノ練習ヲナシ後ニ對スルノ精神ヲ敏感ニ働カスノガ目的デアル、イツ後カラ捕リニ來テモ後ニ目ヲツケテ居テ心ノ窓ガ全身ニ開カレ不意ノ敵襲ニ逢ツテモ早速後ガ靈體一致シテ敏活ナ働ヲナサネバナラヌ。後カラ摑ムトイフ事ハ捕ル方モ非常ニ危險ガ伴フモノデアル。ソレハ敵ノ虛ヲ突クトイフ事ガ自己ノ心ニ油斷ヲ與ヘルカラデアル故ニ不意ニ思ハヌ不覺ヲ取ルコトガアル。大イニ注意ヲ要スル處デアル。縱ヘ敵ガ向フヲ向ヒテ居テモ己

レヨリ腕ガ上ノ時ハ敵ノ體ニハ後ニ武術ノ精神ガ充實シテヰルカラ却ツテ危イ。後ヲトラレタ時ニハ左右前後心ノママニ轉線ヲ悟リ變化シ直チニ敵ニ對ス己ガ身ヲカハス爲ニ敵ガ倒レル樣ニ練習ヲ積ム事ガ必要デアル。卽チ靈感ヲ旺盛ナラシメル爲メニナス術デアル。人體ノ後ハ精神的ニ武術ニ働ク樣ニ出來テヰル。ソコデ日々ノ練習ヲ積ンデ靈感ヲマスマス敏感ナラシメネバナラヌ是ガ出來タラ敵ガ取リニ來タルモ前ニ進ム事ニ依ツテ敵ガ倒レル。

（二）後襟ヲ摑マレルコトハ後方ニ立ツタ敵ガ刀ヲ眞向ニ振リカブツテ切ツテ來ルノト同ジ理デアル。後襟ヲ取ラレタ時ハ速ニ體ヲカハシテ敵ノ心ヲ取リヒシグ爲ニ敵ノ面ヲ打ツカ又面ト水月ヲ打ツテ敵ノ心ノ窓ヲ閉イデシマフ。

戰鬪トナルト後ヨリ進ミ來ル敵ニ對シ速カニ轉換シテ速ニ敵ノ右横(或ハ左横)ヲ突ク樣ナ姿勢ニ變ズ。又敵ノ眞後ニ轉廻シテ右後ヨリ敵ヲ攻メ倒スベシ。殊ニ腰ノ統一ヲハカリ之ヲ丈夫ニナス爲ニ平日練習ヲナスベシ。

若シ後捕リニ於テ第一回ノ戰鬪デ面ヲ打ツテソノ手ヲ敵ニ握ラレタ場合ハ速カニ左足ヲ敵ノ右後ニ引キ體ト共ニ敵ノ背後ニ蹈進ミテ切リ下ロスベシ又右足ヲ敵ノ左ヘ引イテ敵ヲ投グベシ。

以上ノ解說ハ萬ノ技ノ一端ニシテ全技ニ對シ其ノ奧義タル兵道及技ノ詳シキ解說ハ册數ニ限リアリ時ヲ得テ實修ノ際是ヲ傳授ス。

技法圖解竝解說

第一　練習上ノ心得

一、本武術ハ一擊克ク敵ノ死命ヲ制スルモノナルヲ以テ練習ニ際シテハ指導者ノ敎示ヲ守リ徒ニ力ヲ競フベカラズ

二、本武術ハ一ヲ以テ萬ニ當ルノ術ナレバ常ニ前方ノミナラズ四方、八方ノ敵ニ對セル心掛ヲ以テ絶エズ緊張シツツ練磨スルヲ要ス

三、練習ハ常ニ愉快ニ實施スルヲ要ス

四、指導者ノ敎導ハ僅ニ其ノ一端ヲ敎フル過ギズ之ガ活用ノ妙ハ自己ノ不斷ノ練習ニ依リ始メテ體得シ得ルモノトス

徒ニ多クノ業ヲ望マズ一ツ一ツ自己ノモノトナスヲ要ス

五、日々ノ練習ニ際シテハ先ヅ體ノ變更ヨリ始マリ逐次强度ヲ高メ身體ニ無理ヲ生セシメザルヲ要ス又練習初期ハ一回約十分ヲ限度トス然ル時ハ如何ナル老人ト雖モ身體ニ故障ヲ生ズルコトナク愉快ニ練習ヲ續ケ鍛錬ノ目的ヲ達スルコトヲ得ベシ

六、本武術ハ大和魂ヲ鍛練シ誠ノ日本人ヲ作ルヲ目的トシ業ハ委ク秘傳ナルヲ以テ從ニ他人ニ公開シテ流義ノ秘法ヲ暴露シ或ハ市井無類ノ徒ノ惡用ヲ避クベシ

第二 準備動作

（一）構

氣勢ヲ充實シ足ヲ六方ニ開キ半身入身合氣ノ姿勢ヲ以テ敵ニ對ス（第一圖）

總テ構ハ時、位置、土地ノ高低、其ノ時ノ勢等ニ因リ惟神ニ起ルモノニシテ常ニ構ハ心ニアルモノトス

足ノ踏ミ方ニハ外六方、内六方及外巴、内巴アリ練習ノ際ニ傳授ス

第一圖

注意

練習ニ際シテハ敵ノ構、敵トノ間合ヲ考ヘ左或ハ右ノ構ヲ用フ動作ノ終リシ時兩足ハ常ニ六方ニ開キアル如ク練磨スルヲ要ス

敵ニ正對スルハ際多キヲ以テ不利トス

（二）入身

受　右手ヲ以テ仕ノ左手頸ヲ握ル（第二圖）

仕　左手ノ指先ニ力ヲ入レ掌ヲ上ニ向ケ斜右ニ突キ出シツヽ、左足ヨリ受ノ體ニ近ク其ノ右側ニ深ク

第二圖

入リ體ヲ右ニ向ク(第三圖)此ノ時後方ニ注目ス

右手ニテ下ヨリ受ノ手頸ヲ執リ左手ヲ更ニ右ニ振リ受ノ右手ヨリ之ヲ脱シテ直ニ面ヲ打ツ(第四圖)

左手ニテ後襟ヲ執リ(或ハ腰ヲ押ヘ)右足ヲ踏ミ込ミツヽ右前臂ヲ以テ首ヲ押シ下ゲテ倒ス(第五、第六圖)

此時右手ノ指先ニ力ヲ入レ腕ヲ内側ニ向クルコト必要ナリ

第三圖

第四圖

第五圖

第六圖

(三) 體ノ左右ノ變化

受　第二圖ノ如シ

仕　左手ノ指先ニ精神ヲ集中シ之ヲ右前方ニ半圓形ニ突キ出シツヽ掌ヲ上ニ向ケ左足ヲ軸トシテ大キク右ニ轉廻シ後方ニ注目ス(第七、八圖)

體ノ變化後兩足ヲ六方ニ開キ姿勢ヲ安定セシムルヲ要ス

受　仕ノ變化終ラントスル時僅ニ前進シテ仕ノ動作ヲ容易ナラシム

注意

入身體ノ變化共ニ左右ヲ練磨ス

（四）入身轉化

左足ヨリ入身ニ入リツヽ更ニ體ヲ轉化ス

第七圖

第八圖

第九圖

第十圖

第三　徒手對徒手

正面

（五）第一圖ノ構ニテ相對ス

仕　右足ヨリ一歩前進シツヽ右手刀ヲ以テ敵ノ正面ヲ打チ左拳ヲ以テ肋ヲ突ク（第九圖）

受　右手ヲ以テ敵ノ右手刀ヲ受ク

仕　右手刀ヲ以テ受ケタル前臂ヲ斬リ下シツヽ手頸ヲ握リ左手ヲ以テ敵ノ右肘ヲ制シ（第十圖）

左足ヨリ右前方ニ進ミ敵ノ右腕ヲ我體ノ前下方ニ引落シ（第十一圖）

更ニ前進シツヽ、地上ニ押ヘ付ク（之ヲ第一法ト稱ス）

更ニ右ニ廻リ敵ノ右腕ヲ股間ニ押ヘ右手刀ヲ以テ頭ヲ打ツ

注意

我ヨリ進テ攻撃スルコト（兩手及足ヲ同時ニ使用ス）及敵ヲ地上ニ押フル時其ノ腕ヲ體ト直角ナラシムルコト肝要ナリ

第十一圖

第十二圖

（六）敵正面ヲ打チ來ル時

入身轉化ヲ行ヒツヽ、右手ニテ敵ノ手刀ヲ受ケ（五）ノ要領ニテ敵ヲ制ス

（七）

仕　氣勢ヲ以テ敵ノ正面打ヲ導ク

受　右手刀ヲ大キク振リ被リ右足ヨリ一歩前進シツヽ、正面ヲ打ツ

第十三圖

第十四圖

仕　入身ヲ以テ敵ノ右側ニ入リツヽ左拳ヲ以テ肋ヲ突キ右手刀ヲ以テ敵ノ手刀ヲ斬リ下ロス（第十三圖）

更ニ深ク敵ノ後方ニ廻リツヽ（二）ノ要領ニテ敵ノ頸ヲ強ク押シテ倒ス（第十四、十五、十六圖）

注意

實戰ニテハ面ヲ打ツモノトス

第十五圖

第十六圖

第十七圖

第十八圖

（八）

仕　氣勢ヲ以テ敵ノ正面打ヲ導ク

受　右手刀ニテ正面ヲ打ツ（第十七圖）

仕　左足ヨリ前進シテ入身轉化（或ハ其場ニテ體ノ變化）ヲ行ヒ左手刀ヲ以テ敵ノ右手頸ヲ打チ下ス（第十八圖）

左手ヲ以テ敵ノ右手ノ甲ヲ握リ（握リ方無名指ト小指ヲ以テ手頸ヲ握リ母指ニテ無名指ノ附ケ根ヲ制ス）左足ヲ後方ニ引クト同時ニ左手ニ右手ヲ添ヘ敵ノ掌ヲ拳ニ握リ込マシムル如ク力ヲ加ヘツヽ左ニ捩ヂ倒ス（第十九圖）更ニ右手ニテ第二十圖ノ如ク逆ニ執ル此ノ時敵ノ手足ヲ活動セシメザルコト肝要ナリ

第十九圖

第二十圖

第二十一圖

第二十二圖

（九）

仕　（五）ノ如ク正面ト肋トヲ攻撃ス

受　右手ヲ以テ敵ノ手刀ヲ受ク

仕　體ヲ大キク變化シ右手ヲ以テ受ケタル手ヲ斬リ下ロシ掌ヲ敵ノ右手頸ノ所ヘ滑ラシ母指ヲ下ニ廻シツヽ敵ノ右手頸ヲ逆ニ執リ之ヲ胸ノ中央ニ當テ左手ヲ以テ敵ノ前臂ヲ

握リ胸ニ力ヲ入ル、如ク敵ノ右手ヲ制ス（第二十一、二十二、二十三圖）

更ニ後方ニ退キツヽ敵ヲ引キ倒シ敵ノ右側ニ坐シ兩手ヲ以テ敵ノ右腕ヲ制ス（第二十四圖）（之ヲ第二法ト稱ス）

第二十五圖

第二十六圖

第二十三圖

第二十四圖

（十）

仕　（九）ノ如ク攻撃ス

受　（九）ノ如ク受ク

仕　大キク體ヲ變化シタル後（第二十五圖）右手ヲ以テ敵ノ右指先ヲ握リ右ニ捩リツヽ少シク上方ニ突キ上ゲテ左手ヲ以テ掌ヲ逆ニ握リ換ヘ右拳ニテ面ヲ打ツ（第二十六圖）

左足ヲ引キツヽ、右手ニテ逆ニ右肘ヲ制シ更ニ後方ニ引キ倒ス（第二十七圖）（之ヲ第三法ト稱ス）

次テ敵ノ右側ニ坐シ兩腕ヲ十文字ニ組ミ敵ノ右腕ヲ制ス（第二十八圖）

第二十七圖

第二十八圖

第二十九圖

第三十圖

横面

（十一）

仕　氣勢ヲ以テ横面打ヲ導ク

受　右足ヨリ一歩前進シツヽ、右手刀ヲ以テ敵ノ左横面ヲ打ツ

仕　左足ヲ僅ニ左前方ニ踏ミ込ミツヽ、左手刀ヲ以テ敵ノ右手ヲ斬リ拂ヒ右手ニテ面ヲ打ツ（第二十九圖）

次テ深ク入身ニ入リツヽ、右手刀ヲ以テ敵ノ右手刀ヲ右下ニ斬リ下ロスト共ニ左拳ヲ以テ肋ヲ突キ（第三十圖）

更ニ右手ヲ以テ敵ヲ倒ス（第三十一圖）

（十二）技法眞髓ニアル横面ノ鍛錬ニ準ス

仕　氣勢ヲ以テ敵ノ横面打ヲ導ク

受　（十一）ノ如ク横面ヲ打ツ

仕　左足ヲ僅ニ左ニ開キ左手刀ヲ以テ敵ノ右手刀ヲ斬リ下ゲ

右手ヲ以テ面ヲ打ツ

左手ヲ以テ敵ノ右手頸ヲ握リ右手ヲ添ヘ之ヲ頭上ニ振リ

被リツヽ左足ヲ右前方ニ踏ミ込ム（第三十二、三十三圖）

第三十一圖

第三十二圖

第三十三圖

第三十四圖

次テ左足ヲ軸トシ約百八十度右ニ轉廻シ敵ヲ投グ（後方ノ敵ヲ斬ル要領）

注意

敵ノ右腕ヲ刀ト心得テ動作スルヲ要ス

又右手ノ母指ニテ脈部ヲ制スルニハ肝要ナリ

（十三）

仕　敵横面ヲ打チ來リシ時（十一）ノ要領ニテ入身ヲ行ヒタル後右手ニテ敵ノ手頸ヲ下ヨリ握リ左足ヲ引キツヽ第一法ヲ應用ス（第三十五、三十六、三十七圖）

（十四）

仕　（十）ノ要領ニテ體ノ變化ヲ行ヒツヽ第二法ヲ應用ス

第三十五圖

第三十六圖

第三十七圖

第三十八圖

（十五）

仕　（十一）ノ要領ニテ大キク入身轉化ヲ行フト共ニ右手刀ヲ以テ敵ノ右手ヲ十分下方ニ斬リ落シ右手ヲ以テ手首ヲ左手ヲ以テ其上方ヲ握リ（第三十八圖）

左足ヲ踏ミ込ミツヽ、兩手ヲ以テ刀ヲ斬リ下ロス要領ニテ、敵ヲ倒ス（第三十九圖、四十圖）

注意

左手ニテ敵ノ右前臂ヲ攻撃スル要領ハ小指、無名指ニ力ヲ入レテ敵ノ前臂ヲ握リ人差指ノ附根ヲ以テ脈部或ハ脈部ノ稍外側ヲ強ク骨ノ方向ニ壓迫ス

（之ヲ第四法ト稱ス）

第三十九圖

第四十圖

第四十一圖

第四十二圖

投ノ鍛錬

（十六）

受　右足ヲ半歩前ニ出シ兩手ヲ以テ敵ノ兩手頸ヲ握ル

仕　右足ヲ半歩右前方ニ踏ミ出シ次テ左歩ヲ右前方ニ大キク踏ミ込ミツヽ、右手ヲ以テ敵ノ右手頸ヲ執リ（左手ノ指先ニ力ヲ入レ敵ノ右手ヲ肩ノ方向ニ突キ上ゲ左手ノ小指無名指ニ力ヲ入レテ自己ノ方ニ引キ右手ノ母指ニテ敵ノ脈部ヲ壓シ敵ノ右手ヲ完全ニ制ス）（第四十一圖）之ヲ頭上

ニ振リ被ブル（第四十二、四十三圖）

次テ左足ヲ軸トシテ約百八十度右ニ廻リツヽ（第四十四圖）敵ヲ後方ニ投グ（後方ノ敵ヲ斬リ下ロス要領）（第四十五圖）

投ゲ終ルヤ右手ヲ以テ敵ノ右手ヲ逆ニ制ス

第四十三圖

第四十四圖

第四十五圖

第四十六圖

（十七）

受　前項ニ同シ

仕　左足ヲ軸トシテ右ニ廻リ前項ノ要領ニテ敵ヲ投グ

合氣ノ鍛錬

合氣ハ練習ノ德ニ依リテ自然ニ會得シ得ルモノナリ

詳細ハ口授ス

（十八）敵ニ片手ヲ握ラシメタル時

（第四十七、第四十八圖）

第四十七圖

第四十八圖

第四十九圖

第五十圖

（十九）敵ニ兩手ヲ握ラシメタル時

（第四十九、第五十、第五十一圖）

（二十）敵ノ突キ來ル時

（第五十二、第五十三、第五十四圖）

第五十一圖

第五十二圖

第五十三圖

第五十四圖

（二十一）横面ノ鍛錬

受　右手ヲ以テ横面ヲ打ツ

仕　左足ヨリ左前ニ前進シツヽ、左手刀ヲ以テ敵ノ右手ヲ打チ拂ヒ右手刀ヲ以テ面ヲ攻撃ス（第五十五圖）

第五十五圖

第五十六圖

第五十七圖

第五十八圖

後ノ鍛錬

（二十二）

受　右手ヲ以テ後襟ヲ取リ後方ニ引ク（第五十六圖）

仕　敵ノ後襟ヲ引カントスルヤ右足ヲ軸トシ左ニ轉廻シツヽ、敵ノ右後ニ進ミ左手ヲ以テ面ヲ右手ヲ以テ水月ヲ打チ倒ス

（二十三）

受　前ニ同シ

仕　右足ヲ右後方ニ引キツヽ、左手刀ヲ以テ敵ノ面ヲ打ツ（右手ハ他ノ敵ヲ誘フ）（第五十八圖）

受　左手ヲ以テ敵ノ左手ヲ拂フ

仕　左足ヲ大キク後方ニ引キツヽ十分體ヲ前ニ屈シテ敵ノ右後方ニ移リ右手ヲ以テ敵ノ右手ヲ逆ニ制シ左手ヲ以テ敵ノ背ヲ打チ倒ス（第五十九圖）

（二十四）

受　右手ヲ以テ後襟ヲ取リ敵ヲ前方ニ押ス

仕　敵ノ後襟ヲ取ラントスルヤ右足ヲ一歩前ニ踏ミ出シ之ヲ軸トシテ左ニ轉廻シツヽ左手刀ヲ以テ敵ノ面ヲ打チ倒ス（第六十一圖）

第五十九圖

第六十圖

第六十一圖

（二十五）

受　前ニ同シ

仕　敵ノ後襟ヲ取ラントスルヤ右足ヲ軸トシテ右ニ轉廻シツヽ敵ノ右後方ニ入リ右手刀ヲ以テ敵ノ右手ヲ打チ下ロス（第六十二圖）

次テ右足ヲ敵ノ後方ニ踏ミ込ミツヽ右手ヲ以テ敵ノ面ヲ打チ倒ス

第六十二圖

（二十六）

受　兩手ヲ以テ後方ヨリ兩手頸ヲ握ル（第六十四圖）

仕　左足ヲ引キツヽ兩手ヲ振リ被ル（第六十五圖）

次テ右足ヲ引クト同時ニ兩手ヲ斬リ下ロシテ敵ヲ前方ニ投グ（第六十六圖）

第六十三圖

第六十四圖

第六十五圖

第六十六圖

第四 徒手對刀

正面

（二十七）

仕　氣勢ヲ以テ敵ノ攻撃ヲ導ク（第六十七圖）

受　敵ノ正面ヲ斬ル

仕　敵ノ將ニ斬ラントスルヤ神速ニ入身轉化ニ依リテ深ク敵ノ右側ニ入リ左手刀ヲ以テ敵ノ右手頸ヲ打ツ（第六十八圖）此ノ時後方ニ注目ス

第六十七圖

第六十八圖

右拳ニテ面ヲ打ツト共ニ（八）ノ要領ニテ敵ヲ左ニ倒ス（第六十九、第七十圖）（右手ノ小指、無名指ニテ柄ヲ併セ握ルコト必要ナリ）

第六十九圖

第七十圖

次テ敵ノ頭ノ上方ヲ左ニ廻リツ、敵ヲ伏臥セシメ兩手ニテ刀ヲ奪ヒ首ヲ斬ル（第七十一圖）

（二十八）

仕　（二十五）ニ同シ

受　敵ノ正面ヲ斬ル

仕　入身ニ入リツ、肋ヲ突ク（第七十二圖）

次テ　（七）ノ要領ニテ敵ヲ倒ス（第七十三、七十四圖）

第七十一圖

第七十二圖

第七十三圖

第七十四圖

（二十九）

仕　右足ヲ前ニ出シテ構フ氣勢ヲ以テ導クコト前ニ同シ（第七十五圖）

受　敵ノ正面ヲ斬ル

仕　入身ニテ敵ノ左側ニ入リツ、右拳ヲ以テ水月ヲ突ク（第七十六圖）

左手ニテ柄ヲ握リ右手刀ヲ以テ面ヲ打ツ（第七十七圖）

（三十）　劍氣ヲ練リ機眼ヲ養成ス

仕　氣勢ヲ以テ敵ノ攻擊ヲ導ク

受　上段ヨリ正面ヲ打ツ

仕　將ニ斬ラントスルヤ右或ハ左ニ轉化ス

白刃ノ下平然トシテ動作ヲ爲シ得ル迄練磨スルヲ要ス

第七十五圖

第七十六圖

說明

敵ノ將ニ斬ラントスルヤ氣ニ虛隙アリ此ノ方法ニ依リ敵ノ虛隙ヲ自己ノ氣ノ充實ニ依リテ看破リ白刃ノ下明ニ道ヲ自己ノ心ニ求ムル如ク練磨スルモノトス

鐵ト雖異物、間隙アリ鍛錬ニ依リテ鋼トナリ刀ト化ス

實ニ彎リナキ正宗ノ銘刀ハ百錬ノ賜ニシテ人ニ於テモ亦然リトス

第七十七圖

相互ニ虚隙ナキ如ク練磨シ斬レバ必ズ斬リ突ケバ必ズ突ク
ノ氣ヲ養ヒ誠ノ人ト爲ラザルベカラズ

横　面、胴

（三十一）口傳

第八十圖

第八十一圖

第七十八圖

第七十九圖

短　劍

（三十二）短劍（若ハ拳銃）ニテ突クヤ（七）ヲ應用ス（第七十八圖）

（三十三）（八）ヲ應用ス（第七十九圖）

（三十四）

受　短劍ヲ以テ正面ヲ斬ル

仕　將ニ斬ラントスルヤ入身ニ入リツヽ右手ヲ以テ下ヨリ敵ノ右前臂ヲ握リ第一法ヲ應用ス（第八十、第八十一圖）

第五　刀對刀

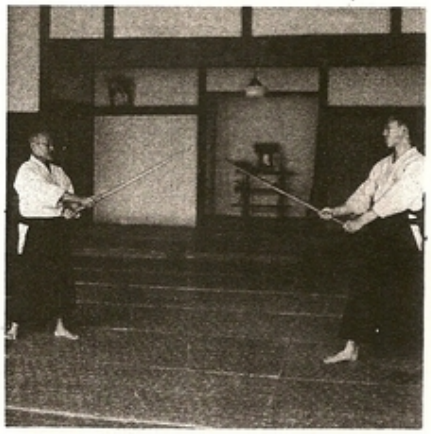
籠手

（三十五）

仕　氣勢ヲ以テ籠手ヲ導ク（第八十二圖）

受　籠手ヲ斬ル

仕　體ヲ左ニ持シツヽ、籠手ヲ斬ル（第八十三圖）



第八十二圖

第八十三圖

面

（三十六）

仕　氣勢ヲ以テ敵ノ右手ヲ導ク

受　正面ヲ斬ル（第八十四圖）

仕　右ニ入身轉化ヲ行ヒツヽ、面ヲ斬ル（第八十五圖）

第八十四圖

第八十五圖

（三十七）

仕　氣勢ヲ以テ正面ヲ導ク

受　正面ヲ斬ル

仕　入身ニ入リツヽ面ヲ斬ル

我敵ヲ斬リ敵ノ刀我ニ當ラザルノ理ハ口授ス

第八十六圖

第八十七圖

第八十八圖

第八十九圖

突

（三十八）

仕　前ニ同シ

受　正面ヲ斬ル

仕　入身ニ入リツヽ刀刃ヲ上ニシテ胸ヲ突キ（第八十七圖）

直ニ面ヲ斬リ（第八十八圖）　更ニ突ク（第八十九圖）

第六　銃　劍

（三十九）

仕　右ノ入身合氣ノ姿勢ヲ以テ對シ敵ノ攻擊ヲ導ク（第九十圖）

受　直突ヲ行フ

仕　入身ニ入リツヽ右手刀ヲ以テ左前臂ヲ斬リ下ロス（第九十一圖）

第九十圖

第九十一圖

第九十二圖

第九十三圖

次テ右手ニテ後襟ヲ取リ左手刀ヲ以テ面ヲ打ツ（第九十二圖）

（四十）

受　前ニ同シ

仕　前ト同樣敵ヲ攻擊シタル後兩手ヲ以テ銃劍ヲ握リ右足ヲ踏ミ込ミツヽ敵ヲ投グ（第九十三、第九十四圖）

（四十一）

受　前ニ同シ

仕　（三十七）ト同ジク入身ニ入リタル後左手ヲ以テ下ヨリ銃剣ヲ握リ左足ヲ引キツヽ右前膊ヲ以テ敵ノ左前膊ヲ制シツヽ逆ヲ取ル（第九十五、第九十六圖）

第九十四圖

第九十五圖

第九十六圖

第九十七圖

（四十二）仕　左入身合氣ノ姿勢ヲ以テ敵ニ對ス（第九十七圖）

受　前ニ同シ

仕　入身ニ入リツヽ左手刀ヲ以テ面ヲ打チ右手刀ヲ以テ左前

臂ヲ打ツ（第九十八圖）

更ニ兩手ヲ以テ銃劍ヲ握リ右足ヲ踏ミ込ミツヽ敵ヲ倒ス（第九十七圖）

第九十八圖

第九十九圖

（四十三）　互ニ銃劍ヲ以テ相對ス

仕　氣勢ヲ以テ攻擊ヲ導ク

受　前ニ同シ

仕　敵將ニ突カントスルヤ左ニ入身轉化ヲ行ヒツヽ敵ヲ刺突ス（第百圖）

第百圖

第百一圖

槍ニ對シテハ概ネ銃劍ニ準シ攻擊ス

第百二圖

第百三圖

第百四圖

第七　終末動作

體ノ變化

（四十四）　投ノ鍛錬ノ要領ニ準ジテ實施ス

受　兩手ヲ以テ仕ノ兩手頸ヲ握ル

仕　投ノ鍛錬ノ要領ニ準シ兩手ノ指先ニ力ヲ入レ左足ヲ右前方ニ踏ミ込ミツヽ兩手ヲ頭上ニ振リ被リ左足ヲ軸トシテ右ニ廻リ兩手ヲ斬リ下ロシツヽ受ノ體ヲ腰ニテ支フ（第百五圖）

第百五圖

第百六圖

次テ反對ニ廻リツヽ舊位置ニ直リ更ニ受ノ右側ニ入リツヽ同ジ要領ニテ實施ス（第百六圖）

爾後之ヲ繰返ス

氣力ノ養成

（四十五）　正坐シテ相對ス（第百七圖）

受　兩手ヲ以テ敵ノ兩手頸ヲ握ル

第百七圖

第百八圖

仕掌ヲ内ニ向ケ指先ニ力ヲ入レテ精神ヲ集中シ刀ヲ振リ被ル心持ニテ敵ヲ押シツヽ兩前臂ヲ擧ゲ（第百八、第百九圖）

右膝ヲ進メツヽ半立トナリテ受ヲ我左側ニ倒ス（第百十第百十一圖）

倒ス時兩掌ヲ稍左右ニ開キ右手ヲ受ノ左肩ノ方向ニ左手ヲ我左前下方ニ押シ下グ兩手ヲ我方ニ引クハ不可ナリ

第百九圖

第百十圖

第百十一圖

第百十二圖

（四十六）

受　前ニ同シ

仕　（四十三）ト概ネ同様ナルモ両掌ヲ外側ニ反シツヽ左前方ニ伸シテ敵ヲ倒ス（第百十二、第百十三圖）

第百十三圖

第百十四圖

（四十七）

受　前ニ同シ

仕　右手ヲ振リ被リツヽ右手ヲ受ノ左肩ノ方向ニ左手ヲ内側ニ振リツヽ左前下方ニ押シ下ゲテ倒ス（第百十四、第百十五圖）

第百十五圖

第百十六圖

（四十八）

受　前ニ同ジ

仕　兩手ヲ以テ掬フ如ク右（左）ニ倒ス（第百十六、第百十七圖）

臂力ノ養成

（四十九）　口授ス

第百十七圖

第百十八圖

背ノ運動

（五十）

仕　兩手ヲ以テ受ノ兩手頸ヲ握ル（第百十八圖）

受　右手ヲ左前ニ踏ミ込ミツヽ旋回シテ背中合セトナリ仕ヲ背上ニ負フ（第百十九圖）

仕　兩手ヲ放チ靜ニ滑リ下ル

第百十九圖

武道奥義（歌）

一、誠をば更に誠に練り上げて
　顯幽一如の眞諦を知れ

一、惟神（カンナガラ）合氣のわざを極むれば
　如何なる敵も襲ふすべなし

一、太刀ふるひ前にあるかと襲ひ來る
　敵の後に我は立ちけり

一、まが敵に切りつけさせて我が姿
　後に立ちて敵を切るべし

一、左右をば切るも拂ふも打捨てて
　人の心はすぐに馳せゆけ

一、取りまきし槍の林に入る時は
　こたては己が心とそ知れ

一、敵多勢我をかこみて攻むるとも
　一人の敵と思ひたたかへ

一、呼びさます一人の敵も心せよ
　多勢の敵は前後左右に

右與儀之事相傳候

植芝守高

昭和十三年六月吉日